

ハピネス

2008(平成20)年10月1日鑑賞<松竹試写室>

★★★★



監督=ホ・ジノ/出演=イム・スジョン/ファン・ジョンミン/コン・ヒョジン (エスピーオー配給/2007年韓国映画/124分)

……肝硬変男と肺疾患女の、田舎の療養院における恋愛。「恋愛映画の巨匠」ホ・ジノ監督の設定はユニークだが、そこに華やかな都会暮らし時代の彼女が登場すると、ダメ男はいかに変節……？ ドロドロした三角関係にしない演出はさすがだが、観ていてイライラする女性が多いはず。しかし、男って所詮こんなもの……？ しかして、『ハピネス』というタイトルに共感できるかどうかは、あなた次第……。

純愛映画の巨匠ホ・ジノ監督が面白い設定で

『八月のクリスマス』(98年)で長編監督デビューし数々の賞を受賞したホ・ジノ監督(『シネマルーム7』132頁参照)は、その後『春の日は過ぎゆく』(01年)、『四月の雪』(05年)(『シネマルーム9』144頁参照)という恋愛映画を連発したため、彼は「恋愛映画の巨匠」と呼ばれているらしい。そんなホ・ジノ監督だから『ハピネス』も当然恋愛映画だが、面白いのはその設定。すなわち、この映画は肝硬変の男ヨンス(ファン・ジョンミン)と肺疾患の女ウニ(イム・スジョン)との純愛を描くもの。

とはいえ『ハピネス』は、ファン・ジョンミンが主演し青龍賞俳優主演賞を受賞した『ユア・マイ・サンシャイン』(05年)(『シネマルーム11』257頁参照)や、ソン・イェジンが主演し中国金鶏百花賞映画祭海外部門主演女優賞を受賞した『私の頭の中の消しゴム』(04年)(『シネマルーム9』137頁参照)のように2人だけのひたむきな純愛モノではなく、典型的な出来の悪い男ヨンスの前の恋人スヨン(コン・ヒョジン)を絡めた三角関係の中で、ヨンスとウニの純愛を描くもの。そう聞くと誰でも『それって矛盾してない?』と思うはずだが、ソウルで自由奔放に生きてきたヨンス

にとって、それは少なくとも一時的には矛盾してなかったよう……？

さあ、肝硬変患者の男と肺疾患患者の女がどこでどのように出会い、どのような恋愛を育んでいくの……？

『箎笥』から5年、あの美人女優イム・スジョンが！

^{たんす}箎笥をキーワードとし、美しい姉妹と若い継母との対立を中心に描いたミステリーホラー『箎笥』(03年)は、私の採点では星2つとその出来はイマイチだった(『シネマルーム6』108頁参照)。しかし、そこに登場した美人姉妹の顔は印象に残ったもの。そこで姉スミ役を演じたイム・スジョンは青龍賞新人賞を受賞し、その後『サッド・ムービー』(05年)ではチョン・ウソンの恋人としていい味を(『シネマルーム13』143頁参照)。

そんな1980年生まれの美女イム・スジョンが、『ハピネス』では肺を患いながらヨンスのためにひたすら尽くす薄幸の美女ウニを見事に演じている。大韓民国映画大賞女優助演賞を受賞したのは、『ハピネス』でウニの恋敵となる都会の女スヨンを演じた、同じ1980年生まれの美女コン・ヒョジンだが、私の目ではチョイ役(?)のコン・ヒョジンより圧倒的な熱演を見せたイム・スジョンに賞をやりたかった気がする。もっとも、この年の大韓民国映画大賞主演女優賞は『シークレット・サンシャイン』(07年)のチョン・ドヨンが断トツだったから、事実上これで決まっていたのかも……(『シネマルーム19』66頁参照)。

青龍賞男優主演賞俳優ファン・ジョンミンの役柄は？

イ・ビョンホンがアラン・ドロンばりのカッコいいヤクザ役(?)を演じた『甘い人生』(05年)では、ファン・ジョンミンはイ・ビョンホンから叩きのめされるペク社長というチョイ役(?)だった(『シネマルーム7』227頁参照)。しかし、『ユア・マイ・サンシャイン』(05年)でHIVに感染したヒロインのウナ役を演じたチョン・ドヨンと共演したファン・ジョンミンは、体重をプラス15kg、マイナス12kgと増減させながら、ひたすらウナを愛する農家の長男坊ソクチュン役を熱演した。そして『ユア・マイ・サンシャイン』では、チョン・ドヨンが大韓民国映画大賞主演女優賞、韓国映画評論家協会賞の主演女優賞、女性映画人フェスティバルの演技賞などを、ファン・ジョンミンが青龍賞男優主演賞を受賞するという快挙を成し遂げた。もちろん、

この映画についての私の採点は星5つ（『シネマルーム11』257頁参照）。

そんなファン・ジョンミンが『ハピネス』では、経営していたクラブが破綻するわ、深刻な肝硬変に冒されていることがわかるわ、という大ピンチに陥るわがまま男ヨンスを演じている。クラブの経営はしばらく友人に譲り、恋人のスヨンともしばらく別れ、1人田舎の療養院「希望の家」に入院し、隔離された集団生活の中での生活改善によって肝硬変の治療に専念しようとしたわけだ。そして、そこから始まるヨンスとウニの恋がこの映画のテーマ。

こんなダメ男になぜ？

肝硬変男と肺疾患女の恋という一風変わった設定は面白いが、若干気に入らないのは、なぜ「希望の家」の中で長い間肺疾患と闘いながら1人で生きてきたウニが、ヨンスのようなダメ男にホレたのかということ。

ダメ男と決めつけるのはかわいそうかもしれないが、私の目にはヨンスは自分の置かれた客観的な状況、すなわち経済的、肉体的には逆境を受け入れ、それと闘い、1日も早くソウルで以前のような華やかな世界に復帰するという意欲が見えないから、ついイライラ。ただ仕方なく「希望の家」に入り、ダラダラと惰性で毎日の生活を送っているという感じなのだ。「希望の家」の中にはじいさん、ばあさんしかおらず、ウニの恋愛対象となるような男はヨンスくらいしかいないから、ひょっとしてそんな消極的な選択……？

「患者同士の恋愛は厳禁です」と院長は忠告したが、本気で結婚するということになれば話は別。その結果、院長をはじめウニを慕っていた多くの患者たちは、「希望の家」の近くで小さな家を構え自給自足の（？）質素な新婚生活を始めた2人を祝福し、ウニも死ぬまでこの幸福が続くと信じていたが……。

喉元過ぎれば……

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」ことは誰でもよくあるが、ヨンスの場合はそれが極端。つまり、田舎でいい空気を吸いながら働き、酒と煙草をやめ、ウニの献身的な看護を受けることによって少しずつ肝硬変が改善し、ほぼ完治となったところで、ヨンスは熱さを忘れてしまったようだ。しかもそのきっかけが、昔の彼女スヨンの突然の訪問というからタチが悪い……？

きっとウニも、スヨンの来訪と2人の会話の様子からこりゃヤバイと感じていたはず。その直後、「しばらくソウルに戻ってくる」というヨンスの言葉に何の反論もせず、ウニは気持よくヨンスを送り出したが……。

こんな別れ話って、ホントにあり？

ヨンスは本来都会が好きで、田舎が嫌い、また、酒と煙草と華やかな生活が好きで、貧乏くさい生活は性に合わない。したがって、好みの女もファッションブルで見栄えのいい女だから、尽くすだけのダサイ女はダメ。それならそうと、最初からそんな看板を掲げて生きていけば納得できるのだが、「希望の家」に入っている時だけ田舎生活にドップリと浸かって、ウニのような女の献身的な看護を受け、肝硬変が治りスヨンの来訪を受けると、たちまち昔の生活に未練が出てくるとは。一体何たること！

ヨンスがいったんソウルに戻った目的は明確ではないが、少なくともこの時点でウニと別れようと思っていたわけではないことは明らかだ。しかし、ソウルに戻って昔の華やかな世界に再び触れ、酒と煙草に再び手を出し、スヨンとの爛れた関係(?)が復活すると、ヨンスのようなだらしのない男はもうダメ。再びウニの元に戻ってきたヨンスの頭の中は、どうやってウニに別れ話を切り出そうかということではいっばいになっていたようだ。しかし、次に登場するシーンは？

「俺から別れようとは言えないから、お前から別れてくれと言ってくれ」とは一体ナニ？ こんな都合のいい別れ話って、ホントにあり……？

『ハピネス』とは、いかにも皮肉

同じ日に観たソン・ガンホ主演の『優雅な世界』(07年)も皮肉タップリなタイトルだったが、この『ハピネス』というタイトルも同じように皮肉タップリ。

「いつまで生きられるかわからないけど、一緒に生きていきたい」と言い始めたのはウニの方だったが、それを受け入れたヨンスも十分その気だったはず。ウニはそう信じていたから、薬を欠かさず飲み続けながらの2人の質素な田舎暮らしは順調に進んでいたし、2人とも結構ハッピーだったはず。したがって、うがった見方をすれば、ヨンスの肝硬変がウニの献身的な看護によって意外に早く治ったのが、2人の「ハピネス」のケチのつき始め……。ヨンスの気持が離れてしまったことを悟ったウニは、ヨンスの荷物を整理し、ヨンスを送り出した後1人の生活を始めたが、走ったりする

とヤバイことがわかっているのに、自分を責めるかのように走り続けたウニは……？

映画は後半からラストに向けて予想外の展開を見せていくから、それはあなた自身の目でしっかりと。それにしても、よく考えたいのは幸せとは何かということ。そこで、この映画のタイトル『ハピネス』の意味をよく考えてみると、こりゃいかにも皮肉……。

2008(平成20)年10月4日記

50



弁護士 坂和章平の
LAWDESHOW

「韓流シネマ・フェスティバル2008」

きょうから来月14日まで
シネマート心齋橋で開催



今秋はこんな映画祭に大集結!

今回の統一テーマはラブ&ヒューマン。初恋・純愛・家族愛・絆・秘密・希望等をテーマとした十七作品が一挙上映される。

イチ押しは、『ハピネス』院「希望の家の肺疾患も夢、幻？ 私の愛唱歌」(七年)。「八月の月の美女が織りなす純愛プリンセス・プリンセス」(九八年)等に、韓流の良玉を再認識の『M』の世界とは全く異なる、白日夢のような物語の醍醐味を映画『M』の男と片田舎にある療養服した男が彼女の愛に応

えられず、昔の恋人とヨリを戻し、道を踏み外していくところ。なぜ男ってこんなにバカなの？

第二は『ユエリ』(〇五年)で斬新な映像美を見せつけたイ・ミョンセ監督の『M』(〇七年)「写真、現代人の多きが不眠症に悩んでいるが、人気作家のそれは深刻。そんな彼が夢遊病者のように路地裏のバーに入り込むと、そこには紫の服を着た少女が。彼が見たのは本物？ それと

第三は『シユリ』(九年)、『JSA』(〇〇年)等のソン・ガンホが、ヤクザの幹部として組と家族面立のシレンマに悩む姿を描く『優雅な世界』(〇七年)。日本のヤクザ映画は『網走番外地』、『仁義なき戦い』、『男の紋章』、『絆』、『丹波』、『シリーズ』等たくさんあるが、日本以上に家族の絆を大切に描く韓国ヤクザの生きざまとは？

韓流ドラマは今、ペ・ヨンジュン主演の『太王四神記』に注目だが、映画館での楽しみは別モノ。イケメン若手韓流スターもいろいろの骨太作品が充実。こりゃもう、行くっきゃないでしょ。

大阪日日新聞 2008(平成20)年10月18日

記事中の画像：© 2007 M&FC & Production M. All Rights Reserved